

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

演劇教育研究は、演劇教育の実践者によって担われることが多く、実践と研究が密接につながっていることが特徴である。したがって、実践報告は演劇教育研究において非常に重要な位置を占めるものである。しかし、実践報告は実践者の主観性を含む個別性の強いものであり、そのために、過去の実践報告を読むことが、現在の実践者が自らの実践を振り返ったり、そこから触発されて新たな実践を創造したりすることにつながっていないという問題をはらんでいた。

本論文は、実践報告に含まれる主観性の問題を、自己肯定感と情緒という二つの要素に焦点化しつつ、劇作家・演出家の如月小春（1956-2000）が残した「八月の子どもたち」記述群という実践報告を題材にしながら、過去の実践報告を読むことを現在の実践を振り返るために機能させるにはどのような方法がありうるのかを明らかにするものである。

本論文には、過去の実践の蓄積を現在の実践に生かすための実践報告の読み直しは可能なのかという、演劇教育の中心的課題に対し、実践報告の主観性を削り落とすのではなく、むしろ実践報告の持つ主観性に意識的になり、その主観性を踏まえた上で読解することで、実践報告を通じた時空を越えた実践者同士の対話を可能にしようとする独創性が認められる。また、如月小春の実践報告を扱うことによって、演劇教育に大きな影響をあたえながらこれまで演劇教育研究では本格的に扱われてこなかった如月小春の演劇教育論としても大きな意義を持っている。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本論文では研究の方法として、質的研究法の一つであり、2000年代以降注目されているオートエスノグラフィーを用いている。執筆者自身が経験したことを文化的、社会的背景に位置づけながら記述するオートエスノグラフィーは、主としてこれまで、特殊な経験をしたマイノリティーに位置付く人々が自らの経験を記述する方法として使われてきた。本論文では、このオートエスノグラフィーを、実践報告をとおして過去の実践者と対話し、実践者としての変容を促していく方法として用いるという研究法の拡大を試みる。そして、筆者自身が如月小春の実践報告の読解経験をオートエスノグラフィーの形式で書くことで、その可能性を実証する構造になっている。

近年、さまざまな質的研究法の使用が試みられている演劇教育研究領域において、研究方法としてのオートエスノグラフィーの使用は独創的であり、過去の実践報告の読解を現在の実践の振り返りに機能させる方法を明らかにするという研究目的を鑑みても妥当なものである。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本論文では、まず、小原國芳、坪内逍遙、飯塚友一郎、青江舜二郎、富田博之といった日本の歴史的な演劇教育論を扱うために、必要な文献が収集され、それらが適切に分析されている。このことによって、演劇教育の実践報告がこれまで持っていた問題があぶり出されている。

また、如月小春の実践報告「八月の子どもたち」については、単行本化されたものだけでなく、雑誌連載の記事、続編の連載、関連本など、入手可能なものすべてが収集され、またそれらの加筆・修正点を見ることで如月の演劇教育観の変化を追うなど、微細で適切な分析がなされていて、

如月小春研究としてもとても意義あるものとなっている。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本論文の後半では、如月小春の実践報告の読解経験が、筆者の演劇教育実践観にどのような変容をもたらしたのかについて、オートエスノグラフィーの形で記述されている。そして、最後に、このオートエスノグラフィーをさらに分析し、どの記述がどのような筆者の変容をあらわしているのかを詳細に説明することによって、オートエスノグラフィーが、現在の自らの実践を振り返る機能を持つことを実証的に導きだしている。この分析は、内容についてのみならず、そこで用いられていた仮名の使用、フィクションの使用、社会的、文化的背景の書き込みなど、オートエスノグラフィーという方法によって可能となる表現上の工夫についても丁寧におこなわれている。そのことによって、オートエスノグラフィーが、なぜ実践者の読解経験を効果的に描き、実践を振り返る上で大きな効果を持つのかについての考察が十分に深まっている。

以上のことから、本論文の考察と結論が妥当であり、学術的水準に達していると評価できる。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本論文では、まず、これまでの演劇教育の歴史を踏まえた上で、演劇教育の実践報告が、現在の実践の振り返りに十分に生かされていない問題を、自己肯定感と情緒に焦点化して指摘した。そして、それを乗り越えるために、オートエスノグラフィーという方法を演劇教育の実践報告を現在の実践の振り返りに生かす方法を明らかにした。この成果は、演劇教育の過去の実践と現在の実践をどのように往還させるのか、そのために演劇教育研究に何ができるのかという演劇教育研究において極めて重要な問題に対する一つの答えとなっている。また、振り返りの方法としてのオートエスノグラフィーの使用は、演劇教育研究におけるオートエスノグラフィーの使用法を提示した新しさのみならず、研究法としてのオートエスノグラフィーの再解釈と拡張という意味でも、極めて大きな意義をもたらしている。

加えて、本論文はこれまで研究的に明らかにされてこなかった如月小春の演劇教育論について本格的に明らかにした初の研究としても大きな意義を持つものである。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員が一致して、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）の学位授与に相応しいと評価した。